Allied Blenders、テランガーナ州で年間440万バルクリットルのモルトスピリッツ生産ライセンスを取得

Allied Blendersはテランガーナ州で年間440万バルクリットルのモルトスピリッツ生産ライセンスを取得し、外部蒸留業者への依存低減へ前進した。

2026年9月16日（水）



Allied Blenders and Distillersは、ワナパルティ県ラングプル村の施設で飲用向けモルトスピリッツを製造するライセンスをテランガーナ州当局から取得した。これにより、同社には同施設で年約440万バルクリットルの認可生産能力が与えられる。

同社は火曜日に提出した証券取引所への届出でこの承認を開示した。ライセンスはテランガーナ州ハイデラバードの禁酒・物品税局長官が付与したもので、同社のPebbair Mandalのユニットに適用される。承認は、ライセンスに定められた条件ならびに州の物品税法および規則に従うことが条件

となっている。

この動きは、これまで生産に用いるモルトスピリッツを外部の蒸留業者に依存していたと同社が説明していることから、Allied Blendersにとって重要だ。新たなライセンスにより、この原料を自社で製造できるようになり、供給の管理強化や外部業者への依存低減につながる可能性がある。同社はまた、この承認が原材料需要を支え、操業効率の改善に寄与するとしている。

Allied Blendersは、このライセンスにより自社のシングルモルト・ウイスキー製品の製造と開発も可能になるとしている。これにより、消費者需要がより高価格帯ブランドへと移るなかで各社がプレミアム製品の拡充を進めているインドのスピリッツ市場の一部で、同社の存在感が広がることになる。

インドは世界最大級のスピリッツ市場の一つであり、ウイスキーは依然として中核カテゴリーだ。こうした文脈では、モルトスピリッツは一部のプレミアム・ウイスキー製品の重要な原料であるため、追加のモルトスピリッツ生産能力の承認は重要となる。ただし同社は、認可能力での生産がいつ始まるのか、どれほどの資金を投じる計画なのか、どの程度の速さでその能力を使う見込みなのか、また今回の承認が既存の社内製造能力と比べてどう位置づけられるのかを明らかにしていない。そのため、供給への正確な影響はまだ算出できない。

提出書類では、認可量は年間約440万バルクリットルとされていた。同社はこの数量が直ちに生産されるとは述べておらず、この承認は現在の生産量ではなく認可された能力として理解すべきだとしている。また、生産立ち上げのスケジュールも示さなかった。

この動きは、Allied Blendersがインド市場で新たなプレミアム・ウイスキーブランド「The Indian Edit」を投入してから間もない時期に出た。同社はこの発売を、エントリーレベル製品を超える消費者が増えるなかで需要が伸びているプレミアム・ウイスキーへの幅広い取り組みの一環と位置づけている。発売前後に公表されたコメントで、マネージングディレクターのAmar Sinha氏は、プレミアム・ウイスキーをインドのスピリッツ事業における大きな成長分野と見ていると述べた。

投資家にとって、このライセンスは、同社が拡大策を進める一方で足元の利益動向がまちまちである中で、新たな事業上の材料となる。直近の四半期決算では、Allied Blendersは第1四半期の連結純利益が前年同期比13%減となった一方、売上高と営業利益は小幅に増加した。純利益は前年同期のRs 56.6 croreからRs 49.2 croreに減少し、売上高は6%増のRs 979 crore、前年はRs 923 croreだった。利払い・税金・減価償却前利益（EBITDA）は3.5%増のRs 115.5 croreで、前年はRs 111.6 crore。EBITDAマージンは12.1%から11.8%に縮小した。

これらの数字は、同社が売上成長を続けている一方で、収益性には依然として圧力がかかっていることを示している。こうした状況では、重要な原料を社内で製造できることが、調達管理の改善や高付加価値製品の支援につながれば、戦略的に有用となる可能性がある。ただし同社は、テランガーナ州の承認に関連した財務見通しを示しておらず、モルトスピリッツの自社生産が短期的にマージンを実質的に変えるかどうかも明らかにしていない。

届出によると、同社が付された条件を遵守する限り、ライセンスは適用法に沿って有効なままだ。ラングプル施設のモルトスピリッツを特に使用する設備の稼働開始、商業生産の開始、製品発売に

ついて、個別の時期は示されなかった。